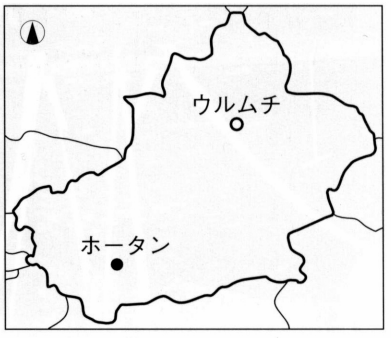
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

シルクロードの織機

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍, 柳, 悦州 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5212

高機【XTF-3】



調査年月日　：1999年6月27日
調査地　：ホータン（和田）市
民族名　：ウイグル（維吾爾）

型式　：高機
材質　：木
概寸　：全長450㎝，全幅105㎝，全高250㎝
経糸保持方式　：垂下式
整経方式　：平整経式
開口具設置方式：綜絖可動式

構成部品

機台１　：<図XTF-3-a-1>
機台２　：<図XTF-3-a-2>
経糸保持具　：経糸保持棒<図XTF-3-a-3>
布巻き棒<図XTF-3-a-4>
経糸間接保持具：錘り<図XTF-3-a-5>
布巻き制御棒<図XTF-3-a-6>
回転軸<図XTF-3-a-7>
開口具　：番目綜絖（６枚１組）
<図XTF-3-a-8>
開口補助具　：コイル・バネ（６本）
<図XTF-3-a-9>
踏み木（６本）<図XTF-3-a-10>
緯入具　：杼<写真XTF-5-3>と同様
緯打具　：筬<図XTF-3-a-11>
緯打補助具　：腕木（２本）<図XTF-3-a-12>
錘り（２個）<図XTF-3-a-13>
経糸整列具　：綾棒（２本）<図XTF-3-a-14>
<図XTF-3-a-15>
幅出し具　：伸子<図XTF-3-a-16>
その他　：座板<図XTF-3-a-17>
経巻き棒<図XTF-3-a-18>

製織中の織物

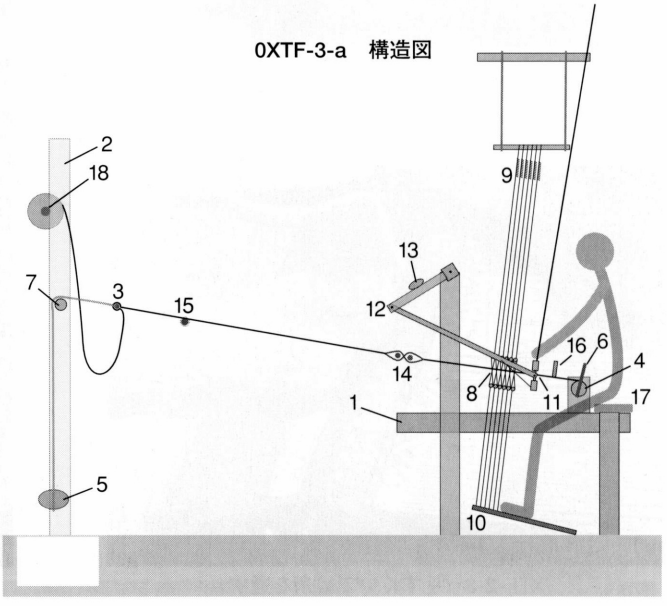
織技法　：経絣織
地組織　：繻子織組織
素材　：絹
用途　：服地
経糸全長　：2000㎝以上
織幅　：45㎝

織り手　：男性１人

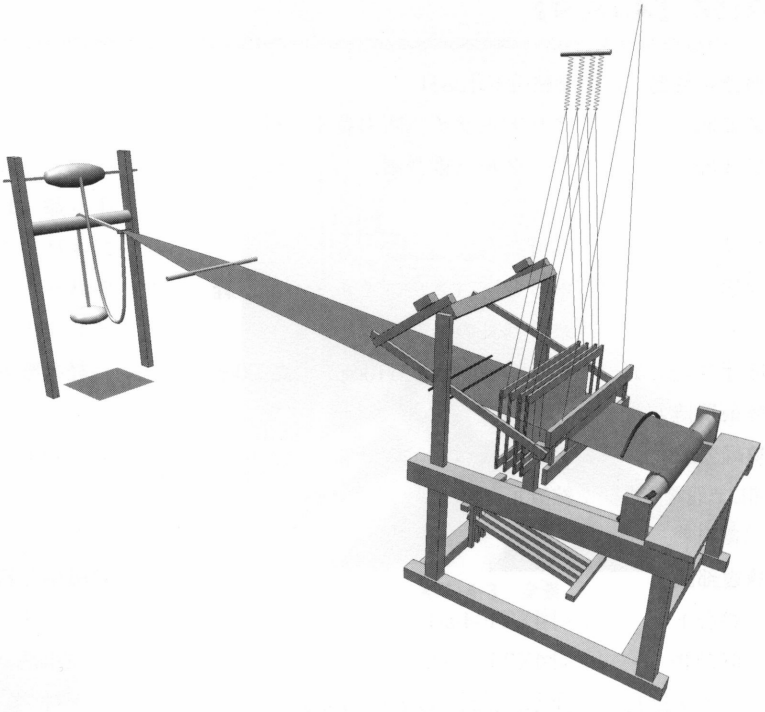
調査メモ

この高機は、ホータン市シャマリバグ（夏馬力巴格）村の民家の土間で使われていた３台の高機のうちの１つで、土間の外では枠機【XFJ-1】でカーペットも織られていた。この高機の機台は分離型であった。経糸の保持方式は垂下式であり、経糸がくくられた経糸保持棒の先に繋がれた石の錘りは、窓のそばに立てられた２本の柱に横長の回転軸を組み込んだ、前方の機台で保持されており、経糸の張力を調整している。また、先端棒にくくられた経糸の先は、経巻き棒に巻かれており、この経巻き棒も２本の柱のあいだに組み込まれている。なお、錘りの下の地面には、深さ50㎝あまりの穴が掘られている。これは経糸の繰り出す回数を少なくするための工夫で、経糸を繰り出すさいには、錘りは穴の底ぎりぎりまで下げられる。開口具としては、６枚１組の番目綜絖があり、６本の踏み木を交互に踏み分けて繻子織組織の経絣が織られている。なお、個々の番目綜絖は、天井から吊り下げられたコイル・バネに繋がれており、踏み木を踏むことによって、それぞれの綜絖が

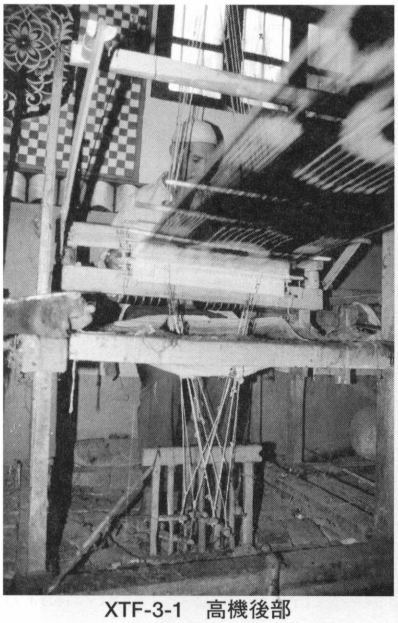
0XTF-3-a　構造図



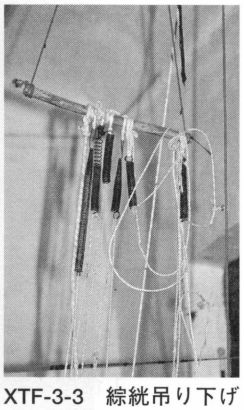
単独で経糸の開口をおこなう仕掛けとなっている。となりの機では、ゴム紐によって、綜絖枠が吊り下げられていた。緯打具としてもちいられている筬には、腕木が付属しており、左右の腕木の上腕部には、緯糸の打ち込みを強くするための錘りとして、石がくくりつけられている。



XTF-3-b　模式図



XTF-3-1　高機後部

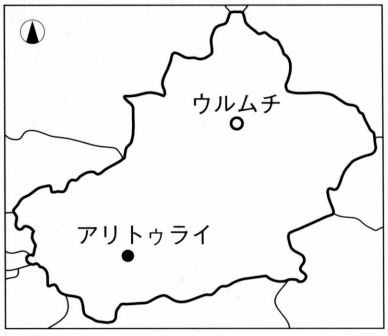


XTF-3-3　綜絖吊り下げ
コイル・バネ

XTF-3-4　高機前部

XTF-3-2　開口装置と織り手

高機【XTF-4】



調査年月日　：1999年6月28日
調査地　：アリトゥライ（阿力特来）村
民族名　：ウイグル（維吾爾）

型式　：高機
材質　：木，金属（筬，コイル・バネ，経糸整列具の一部）
概寸　：全長800㎝，全幅110㎝，全高200㎝
経糸保持方式　：垂下式
整経方式　：平整経式
開口具設置方式　：綜絖可動式

構成部品

機台１　：<図XTF-4-a-1>
機台２　：<図XTF-4-a-2>
経糸保持具　：経糸保持棒<図XTF-4-a-3>
布巻き棒<図XTF-4-a-4>
経糸間接保持具：錘り<図XTF-4-a-5>
布巻き制御棒
<図XTF-4-a-6>
回転軸<図XTF-4-a-7>
開口具　：番目綜絖（６枚１組）
<図XTF-4-a-8>
開口補助具　：コイル・バネ（６本）
<図XTF-4-a-9>
踏み木（６本）<図XTF-4-a-10>
緯入具　：杼<写真XTF-5-3>と同様
緯打具　：筬<図XTF-4-a-11>
緯打補助具　：腕木（２本）<図XTF-4-a-12>
経糸整列具　：綾棒（２本）<図XTF-4-a-13>
<図XTF-4-a-14><図XTF-4-a-15>
その他　：座板<図XTF-4-a-16>
経巻き棒<図XTF-4-a-17>

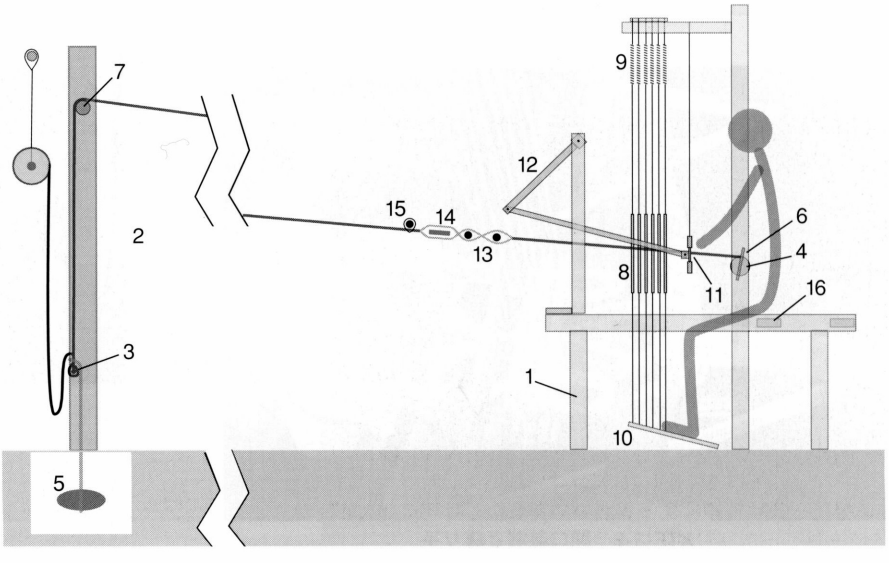
製織中の織物

織技法　：経絣織
地組織　：繻子織組織
素材　：絹
用途　：服地
経糸全長　：2000㎝以上
織幅　：45㎝

織り手　：男性１人

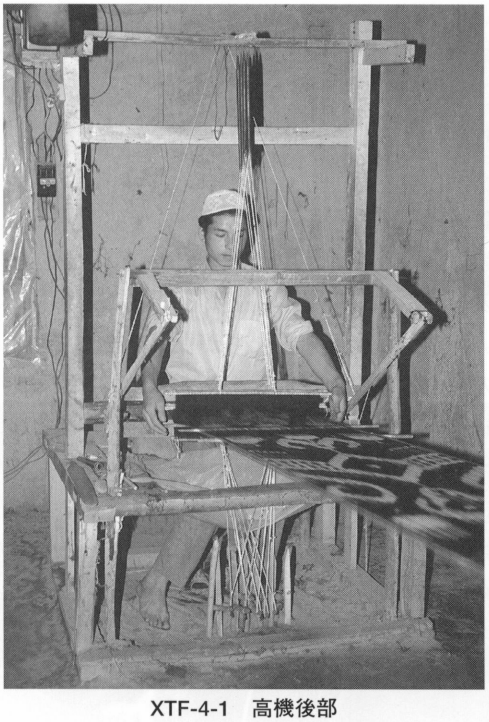
調査メモ

この高機は、ホータン市東北約10kmにあるロップ（洛浦）県で織物業を営んでいる民家の土間に設置されていた。この家には２台の高機と、動力織機が１台あった。高機の機台は分離型で、経糸の保持方式は垂下式である。経糸がくくられた経糸保持棒の先に繋がれた石の錘りは、土間に立てられた２本の

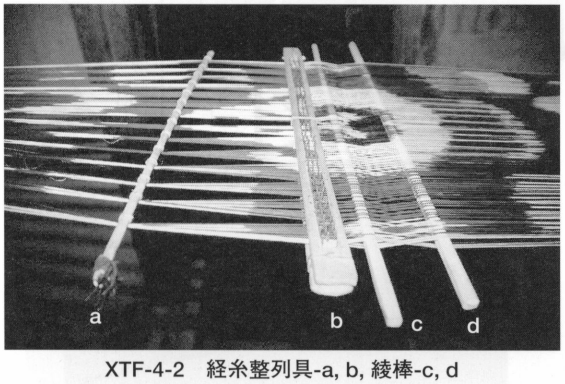


XTF-4-a　構造図

柱に横長の回転軸から吊るされた状態で、経糸の張力を調整している。また、経糸保持棒にくくられた経糸の先は、玉状に巻かれており、天井から吊るされている。開口具としては、6枚１組の番目綜絖があり、6本の踏み木を交互に踏み分けて繻子織組織の経絣が織られている。個々の番目綜絖は、織り手側の機枠の上部から吊り下げられたコイル・バネに繋がれており、踏み木を踏むことによって、それぞれの綜絖が単独で経糸の開口をおこなう仕掛けとなっている。緯打具としてもちいられている筬には、金筬が使われており、筬には腕木が付属している。なお、番目綜絖に付属しているコイル・バネは1996年に使い始めたもので、それ以前はゴム紐を使っていたという。また、ゴム紐も1980年代に使い始めたもので、それ以前の番目綜絖は天秤仕掛けということであった。

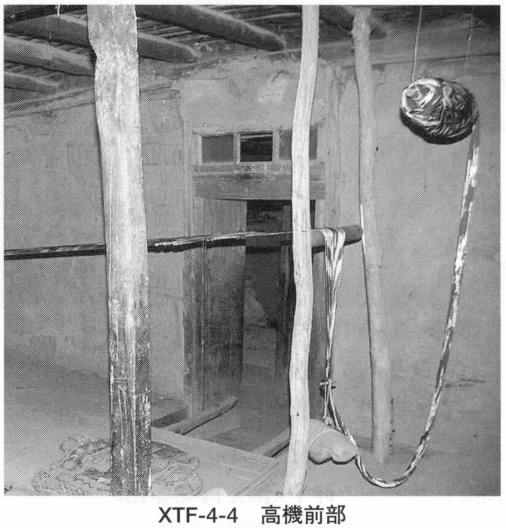


XTF-4-1　高機後部

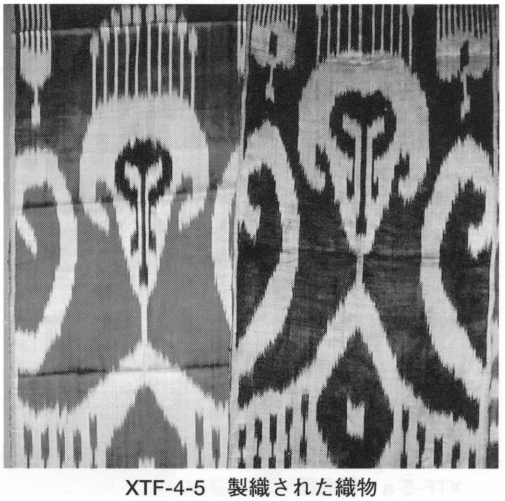


XTF-4-2　経糸整列具-a, b, 綾棒-c, d
aは経糸を分けて細棒に巻き止めてある。bは下の板に釘を打ち経糸を広げ穴が開いた上板で挟み込んである。

XTF-4-3　全景

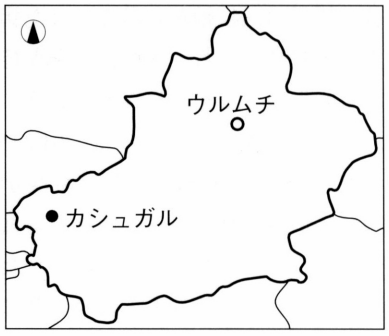


XTF-4-4　高機前部



XTF-4-5　製織された織物

高機【XTF-5】



調査年月日　：1999年6月30日
調査地　：カシュガル（喀什）市
民族名　：ウイグル（維吾爾）

型式　：高機
材質　：木
概寸　：全長370㎝，全幅150㎝，全高157㎝
経糸保持方式　：垂下式
整経方式　：平整経式
開口具設置方式：綜絖可動式

構成部品

機台　：<図XTF-5-a-1>
経糸保持具　：経糸保持棒<図XTF-5-a-2>
布巻き棒<図XTF-5-a-3>
経糸間接保持具：錘り（２個）<図XTF-5-a-4>
布巻き制御棒
<図XTF-5-a-5>
開口具　：番目綜絖（２枚１組）
<図XTF-5-a-6>
開口補助具　：天秤棒（３個）<図XTF-5-a-7>
踏み木（２本）<図XTF-5-a-8>
緯入具　：杼<写真XTF-5-3>
緯打具　：筬<図XTF-5-a-9>
緯打補助具　：腕木（２本）<図XTF-5-a-10>
経糸整列具　：綾棒（２本）<図XTF-5-a-11>
綾板（１枚）<図XTF-5-a-12>
幅出し具　：伸子<図XTF-5-a-13>
その他　：座板<図XTF-5-a-14>

経糸玉<図XTF-5-a-15>

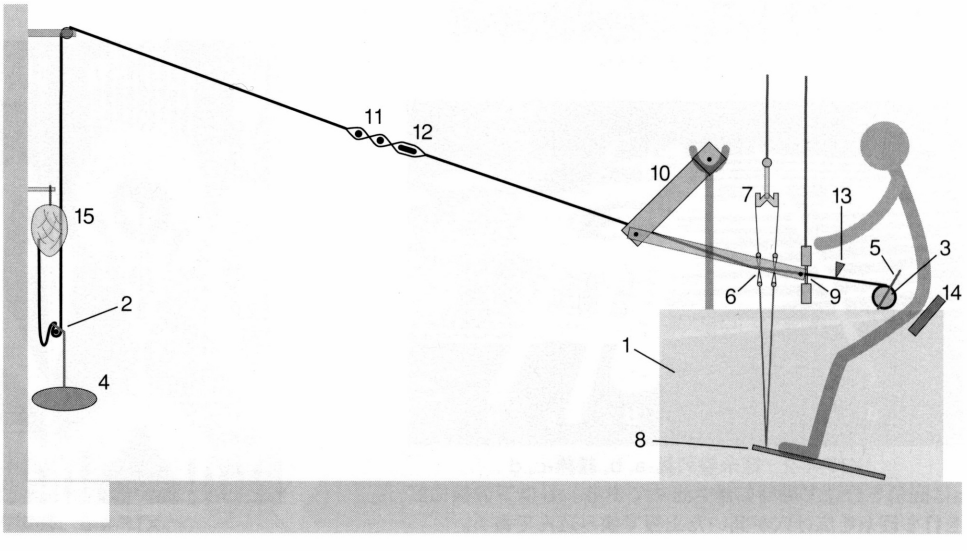
製織中の織物

織技法　：無地平織
地組織　：平織組織
素材　：木綿
用途　：小麦収納袋用布
経糸全長　：2000㎝以上
織幅　：26.5㎝

織り手　：男性１人

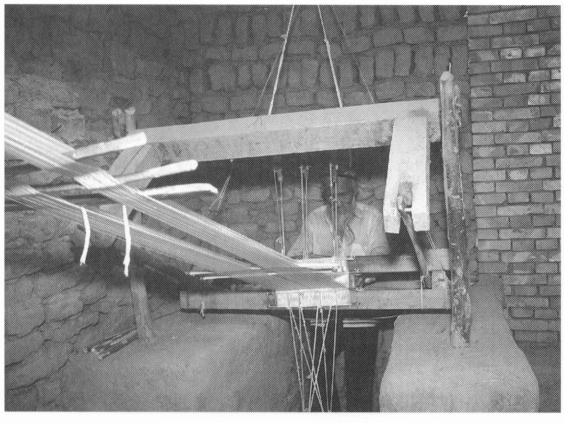
調査メモ

この高機はカシュガル市ジグリク（其格力克）村で、小麦を収納する袋用の布を織るために使用されていた。かつては多くの男たちが機織りをしていたが、３万人もの人口を擁するこの村で、今なお機織りを続けているのは、この機織りをしていた老人だけということであった。高機は、機織り専用のレンガの壁に囲まれた小部屋にちょうどおさまる状態で設置されていた。この高機の機台は、レンガを積んでつくられており、レンガの上に筬の腕木を支える２本

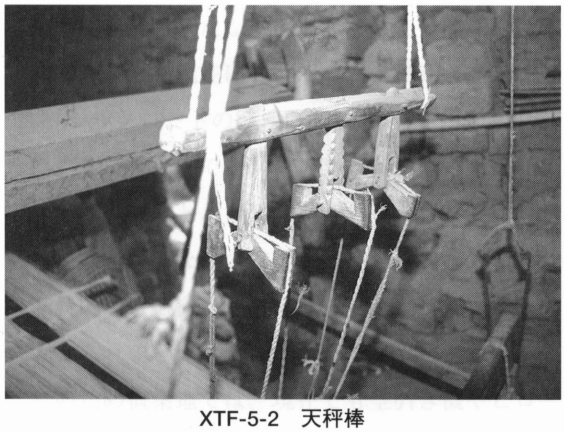


XTF-5-a　構造図

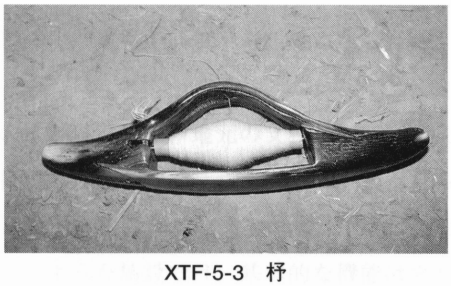
の支柱が立っている。経糸の保持方式は垂下式である。経糸は先端部で２つに収束しており、それぞれの経糸は経糸保持棒にくくられている。そしてさらに、それぞれの経糸保持棒には、錘りが吊るされて、経糸の張力が調整されている。また、経糸保持棒にくくられた経糸の先は、それぞれ玉状に巻いて、壁に打ち込まれた棒に吊るされている。開口具としては、２枚１組の番目綜絖が使われており、これらの綜絖は天秤棒と天秤棒を吊るした棒を介して、天井に渡された梁から、筬とともに吊るされている。なお、筬には腕木が付属しており、上腕部には太くて重い部材を使って、強い打ち込みができる仕掛けとなっていた。



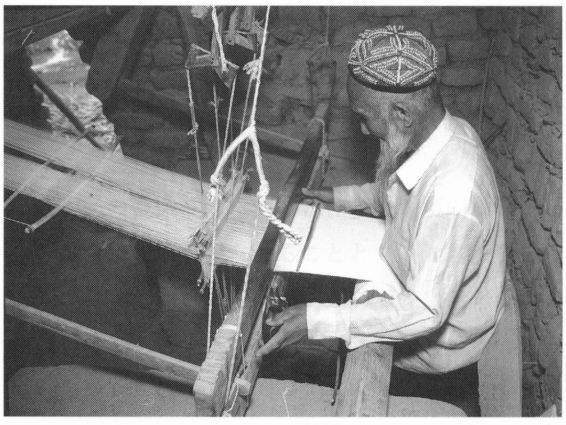
XTF-5-1　筬の腕木



XTF-5-2　天秤棒

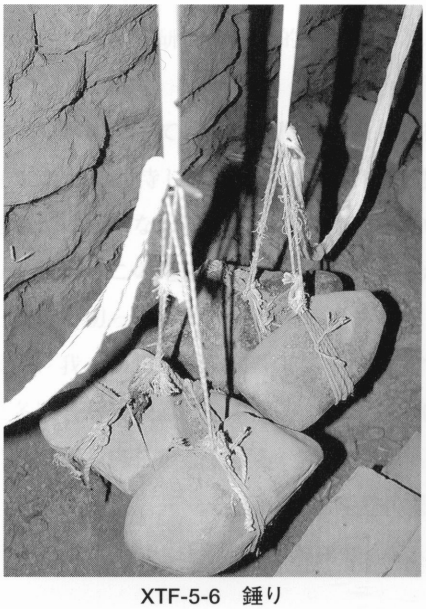


XTF-5-3　杼



XTF-5-4　機織り

XTF-5-5　経糸の先端部



XTF-5-6　錘り